

トピックス

1. 播州日誌「糟糠の妻」

2. 社労士への道 15回「新規適用」



福留経営労務管理事務所

姫路龍馬会

社会保険労務士・行政書士

福留章

# 龍馬通信

No. 47

2021年11月号

## 立冬～小雪の候 光陰矢の如し

6枚つづりのカレンダーも最後の1枚。光陰矢の如しとは言うけれど、歳をとればとるほど、その速さは増すようだ。本当にもうついていけないのが実感だ。振り返ってみて果たしてこの1年、何を成し得ただろうか。年頭の威勢の良い年間計画は絵に描いた餅状態。ただだらだらと無為に過ごした時間を苦々しく思い出す。また、1つ歳をとる。デジタル化に挑戦の掛け声は良かったけれど、若い人の勢いには圧倒されるし、やはり嫌いなものは嫌いだ。今年の初めに読んだ本の中に次のような記述があった。「永遠に生きる如く学べ、そして明日死ぬ如く今日を生きよ。」確かガンジーの言葉であったように記憶しているが、一寸と自信がない。それを机の前に張り出して今年の目標としてきた。しかし厳しすぎて私にはとてもその覚悟ができないまま、惰性に流されてしまった。10月下旬から急に気温が下がり始めた。北国からは初雪の便りもちらほら。明るさが見えてきたコロナ終息の気配だが、不安は今しばらくはなくなるだろう。その季節の中で今年は特に風の冷たさを感じている。皆様ご自愛ください。



※立冬 11月7日頃      ※小雪 11月22日頃

## 『龍馬と私』 ～ 大政奉還 (2) ～

高知に帰省した折に、購入した「龍馬書簡集」(高知県立坂本龍馬記念館)を見ると1867年(慶応3年)10月。まさに大政奉還をめぐって、時代を動かす大波小波が押し寄せた頃。龍馬と後藤象二郎はその往復書簡の中でお互いに決意を示し合っている。

10月13日、後藤あて書簡(記念館所蔵)。現代語訳

ご相談ありました建白の事は、万一実行されなかった場合、もとより必死の覚悟でしょうから、あなたが二条城から下城されない時は、海援隊一手を率いて、將軍慶喜を帰り道に待ち受け、国家のため不具戴天の敵を討ちます。成功しても失敗しても、(後藤)先生とはあの世でご面会いたしましょう。

建白書の草案にある、一切の政治と刑罰の権利を朝廷に奉還する云々について、この一句が他日幕府より出る文書の中に万一書かれていないか、あるいはこの一句の前後を入れ替えて、政刑を奉還することを阻害するようなことがあれば、従来これは鎌倉幕府以来、武家に委ねられた権利で、その権利を返す重大な事なので、幕府においては、まったく決断が難しい事です。ゆえに二条城での議論の目的はただこの一条にあります。先生自身の失策のために天下の大きな機会を失うことになれば、その罪は天地から許されないほどのものです。もしそうなれば、私もまた、薩長両藩から責められ、どうして生きていられましょうか。

謹言。慶応三年十月十三日 坂本直柔

このように龍馬は後藤を厳しく叱咤激励する内容となっています。「死を覚悟して臨んでほしい。」と書き、海援隊出動の事も書いています。これは半分冗談のようなものでその頃肝胆相照らす仲となっていた証拠のようなものでお互いにわかって書いていると思われる。後藤からの返書はない。

次いで11月の書簡には事実上大政奉還が決まってからの龍馬の動向を後藤に報告しています。龍馬の福井行きは土佐藩参政後藤の命を受けたもので、10月24日福井に向かい11月5日に帰京しています。

後藤は大政奉還後の山内容堂へ状況説明の為、土佐に帰国中であり、その後藤に帰京後ただちに書いたものと思われます。

#### 現代語訳の概略

10月28日に福井に到着。後藤から預かった書簡(8月25日付松平春嶽宛山内容堂書簡)を取り次ぎ役の伴啓三郎に渡した事。お目通りかなわなかった事、そして最重要な部分として春嶽あるいは福井藩としては「將軍家が政権をお返ししても、將軍職もともにお返ししなければ、いくらご反省していると申しても天下の人、心の折り合いがつかえません。」と記して徳川家が將軍職を返上して一大名に戻らなければならぬと考えていた。これは非常に重要なことで徳川家から権力を奪えなければ、大政奉還の意味がないと述べています。2通の後藤への書簡は切迫した状況の中で龍馬の動向を伝えたものでその真筆が記念館に所蔵されていることはいずれにしても龍馬が中心となって根回しして、時の有力者を動かし大政奉還に至ったという事実は間違いないようです。

大政奉還となった日、後藤は「大樹(慶喜)公、政権を調停に返す之号令を示せり。」と龍馬に報知。龍馬は「將軍家今日の御心中さこそと察し奉る」と言い落涙したといわれている。



後藤象二郎  
1838年～1897年

## 播州日誌



### 「吾輩は猫である」

名前は時々あった。野良猫になってからは、もちろんない。今は高砂市の天川東公園で暮らしている。よくしたもので公園の中に、夏は夏用に、冬は冬用の寝場所がある。餌も特に困ることもない。一度だけ腹が減って公園内に群れていた鳩を食べたが、骨っぽくてそれ以来手を出していない。ルール破りだがたまにはキャットフードをテーブルの上に置いてくれる奇様な人もいる。早朝は円型の花壇があるコーナーのあたりに出て、のんびりと今日1日何をしようかなどと考えている。

始発の上り新幹線が公園近くの高架を通過する頃、決まってそのコーナーに入ってくる奴がいる。結構歳だと思いがしかとは判らない。本人は結構若ぶったなりをしている。入ってくるなりいきなり深呼吸を5回。いわゆるロングブレスって言うやつだ。どうやらダイエット目的のウォーキングとストレッチらしい。噂では自宅から公園まで2キロ歩いているらしく、途中土手の上、橋の上あたりで体操や腰痛防止のストレッチをし、歩きながら両手に力を入れて折り曲げ、さらには後に反らせて腕の筋肉が落ちないようにしているらしい。その上こいつは変わった奴で歩きながらいつも呪文のようなものを唱えている。自分で自分の名前に「ありがとう」と言ったり、先祖や両親、兄弟、家族の名前をぶつぶつと言った後で「ありがとう」を付け加える。「ありがとう」「ありがとう」って浜村淳じゃあるまいし…。吾輩は大体コーナーの一角にある東屋の付近にちょこんと座って奴を眺めたり、知らんぷりをして毛づくろいをしている。奴は猫嫌いに違い

ない。さすがに威嚇してきたりはしないけれど、チラチラと見る程度で近寄ってきたりもしない。たった1度だけ宝くじが当たった時はじっと見つめて「ありがとうな。」と言いやがった。そんなこと我輩には関係ない。30センチほどの高さのベンチに片足を掛けて上ったり下りたりを20回、次は腰痛予防の屈伸運動、その次にはすぐ吾輩の近くでゴルフの素振りのようなことを30回。そしてまたロングプレス、これを通算20回。花壇の周りをウィリーウォーク(両手を挙げて腰をフリフリして歩く)。その後は花壇の縁石の上をかなりのスピードで周り、とどめは水道の蛇口のある台に手をかけて腕立て伏せ50回。まあとにかく忙しい。夏はもう汗びっしょりになっている。



その後満足げにうなずきながら、スタスタとコーナーを出て行く。もちろん挨拶は無い。無愛想な奴だがいいところもある。自動販売機のところを片付けている。変なじじいだが毎朝の事だから、その時間は付き合っている。何の縁もゆかりもないけれど…。明日も会えるかな…。知らんけど。

2021. 10. 25

## 「<sup>そうこう</sup>糟糠の妻」

家内の実家は青森県の下北半島。奇岩で有名な名勝(仏ヶ浦)に近い半農半漁の寒村である。50年も前になる。千葉県船橋市の食品会社で学生時代のバイト先で彼女と出会った。宿直のバイトをしていたが毎朝、朝食に手作りのサンドイッチやおにぎりを差し入れてくれた。年配のおじさんとの2人勤務だったので、月に2~3度は彼女にタクシーで迎えに来てもらって船橋駅前によく飲みに行った。すべて彼女のおごりだった。津田沼にあった私のアパートで清掃・洗濯はもちろん、身の回りの世話は全て彼女がやってくれた。上司からはよく「お前、いい加減にしとけよ。」と注意を受けた。いわゆる青森からの出稼ぎで毎月の給与の半分以上を青森の実家に仕送りをしていた。まじめで一途な人だった。昭和45年に大学卒業と同時にバイト先であった食品会社の部長に乞われて就職した。新聞社への就職がうまくいかなかったこともあり、乞われるままの就職であった。就職した年の11月3日、彼女の誕生日に身内だけの結婚式をあげて入籍した。そして11月下旬に嫁とり(結婚の申入れ、追認)に初めて実家を訪れた。北国では冬支度が始まる頃である。東京から特急列車でひたすら東北地方を北上。途中、仙台で彼女の姉さん宅で一泊。翌日、青森県に入る。東北本線の「野辺地」という駅で下北線に乗り換え、「佐井」という終着駅に到着。字が2つもつく地番ゆえに「佐井」からはバスかタクシー。結局便数のこともあってタクシーを利用。20分程でようやく実家に辿り着いた。そうそう「佐井駅」には秘境佐井村、日本猿の生息日本最北端の町という看板があった。まさに秘境だ。

実家は国道(といっても未舗装一車線)に面しており、それなりの大きさがある。3年くらい後に夏限定の民宿を経営することになる。義父は一時期、佐井村の村議を務めたことがあり、その時にバスの乗り入れを実現させたという。横浜(妻の旧姓)の家に婿が来たというので、親類知人が次々に現れて挨拶をしていく。方言がキツくて意味不明なことが多いが、こちらはひたすら笑顔でいるしかない。国道の向かう側は海。耳をすませば波の音が聞こえてくる。義兄が漁協に勤めていることもあり、新鮮な魚が毎日のように食事に出る。3泊4日中、ずっとごちそう攻めに合った。何しろ「うに」が毎食ごとに皿に山盛り出てくる。とげとげがまだ動いているのを2つに割って、スプーンで房状のものをすくいとって口に入れる。まさに海の幸、美味である。都会でこんな食べ方ができる訳がない。しかしそれも2日連続となると少し閉口気味となる。家内にそっと肉系のものを出してくれるように頼む。その日の夕食は北海道産のジンギスカン。太い

ハムのような形状のものを輪切りにして、野菜とともに鉄板で焼く。まさに絶品。その後、こんなにうまいジンギスカンを食べたことがない。

親切に囲まれて幸せな日々であったが、もう一つ、忘れられないことがある。実家のトイレは国道を渡った海辺にぼつんと立っている。民宿にするために家の中にトイレを移したのは数年後のこと。夜中、便意を催した私は家内を起こし、懐中電灯を頼りに付き合ってもらう。波の打ち寄せる音以外、何も聞こえてこない静寂の中、トイレをする。ライトをトイレの釘に引っ掛けて。もちろんぼつとん便所。家内は真っ暗闇の中、少し離れたところで待っている。夜だけになんか寒い。いかに夫婦とはいえ、まだ新婚の頃。なるべく音がしないように、また家内を長く待たせてはいけないと思えば思うほど、うまくいかない。あれ程気を遣ったトイレは長い人生の中でもそれっきりである。糟糠とは「かす」と「ぬか」の意味。糟糠の妻とは若い頃から貧苦を分かち合いともに老いた妻をいう。結婚以来今年で51年。文字通り苦楽をともにしてきた。今思えば苦しく辛いことの方が多かったように思う。家内は我慢強く生きた。私のわがママを「献身」という二文字で支えてくれた。自分のことはさておき、私や子どものことを先にする。そんな家内だった。何度も泣かせたこともある。大したこともないのに腹を立てて家内を困らせた。自分も歳をとって今となっては反省ばかり。せめて余生は幸福な日々にしてあげたいと思う。11月3日は家内の誕生日。そして52回目の結婚記念日。せめてもの罪滅ぼしに今年こそびっくりするようなプレゼントを今から考えている。

2021. 10. 29

## 「社労士への道」

### 第15回 「新規適用」

出口に向かっていた私に職員の方が追いかけてきて、「先生、すみません。課長がもう少し話を…と言っています。」そりゃそうだろうと思い直してもう一度席に戻る。「先生、せっかくとりまとめていただいているなら是非新規適用を。私の立場では提出された書類をみて判断しますから。」ということだった。会社と相談をして担当の事務員さんと手分けをして10軒ずつくらいの店舗をまわる。相当な仕事量だった。被保険者、扶養家族を入れると軽く100人を超えた。支えになったのは、新規適用を喜んでくれた人たちの声だった。約1ヵ月程かけて書類を作りあげた。その厚みはゆうに20センチを超えていた。当時、社会保険の新規適用は20日〆切で翌月1日から加入というルールがあった。適用課の窓口は二つ。一般の人も社労士も隔てなく並ぶのだが、当たり外れがあり、人数が少ないから早く順番が来る訳ではない。難易度の高い書類は時間がかかるからである。

さて20日、当日、私は分厚い書類をかかえて左側の窓口へ。新規適用の〆切日は社労士も多く手続きに来る。窓口審査はざっくりとしたものだが、それでも数社分ということになると時間も手間もかかる。いつの間にか私の列に並ぶ人がいなくなり右側の列に長い行列。そしてヒソヒソ話をする声がかきこえてくる。当時の支部の支部長、副支部長もたまたま来ていた。「福留先生、えらい事業所もってるなあ。」「まだ開業して日も浅いのになんか営業してるんやろ。」といった声。それに気付いた私は有頂天。やったやったと心の中で叫んでいた。そして無事に新規適用の手続きが終わり、若干の修正はあったものの、会社全員、新規加入となった。大きな達成感、そして社労士になってよかったという感激。開業数年後の快挙に本当に酔いしれた。一時期社会保険事務所でも特別な目で見られているような気がした。社労士となって行政協力にもよく出してもらった。特に年度更新の時の協力は嬉しかった。手当はそれ程ではなかったけれど、社労士の先輩方と肩を並べて仕事ができる喜びは格別のものだった。

忘れられないのは1番最初に私が当たった建設業のややこしいやつ。さすがに途中でギブアップして労基署の職員の方に手伝ってもらった。いろいろな経験、学びながら身につけていく能力が目に見えるようで楽しく充実した日々が続いた。社労士になってよかったというより、社労士の道しかなかったというのが実感であった。